

學校
讀本
小學生
徒心得

K110,1
15

B 1

238-3



明治十一年七月改刻

學校

讀本

小學生徒心得

東京府

小學生徒心得

第一條

學文を爲すに他あり智を開き身を脩

め才藝を長し人より頼らずして自營の

道を立つるよりありされば生徒たるも

のり第一身の行を正しく常に學業を

勉勵し將來の幸福を受る様心懸くる

こと肝要あり

第二條

常は舉止言語を慎
み一意に教師の指
揮に従ひて教を受
くべし苟且も粗
暴の振舞をなし他
生の嘲笑をうけざ
る様心かくべし



第三條

教師ハ我に學術を授くる恩人なり常
に敬禮の意を失ふべからず

第四條

朝ハかならざ早く起き先衣服を著替
へ顔と手を洗ひ口を嗽き髪を櫛り而
して後尊長に一禮をおいて其安否を
伺ふべし

第五條

毎朝食事終れば學校より出る用意を爲し、教場にて用ゐるべき書物石盤等を取り落さざる様致すべし

第六條

學校より登るべき刻限ハ課業の始る刻限の十分前たるべし

第七條

學校より至れば先扣所より入り行厨を我坐席より置き教師の差圖を待ちて教場に入るべし、決して高聲遊戯など爲すべからず

第八條



小學生生活
教場に入りて席に
就くときハ教師ハ
敬禮を行ふべし

第九條

若事故ありて出校
の刻限ハ後れたる
ときは其由を教師
ハ告げて差圖を受

くべし

第十條

教を受るときは勿論總て我意我慢を
出さべからず教場にて己の意を述べ
と欲せば右の手を揚げて其意を知ら
しめ教師の許可を受けて後れたるか
言すべし

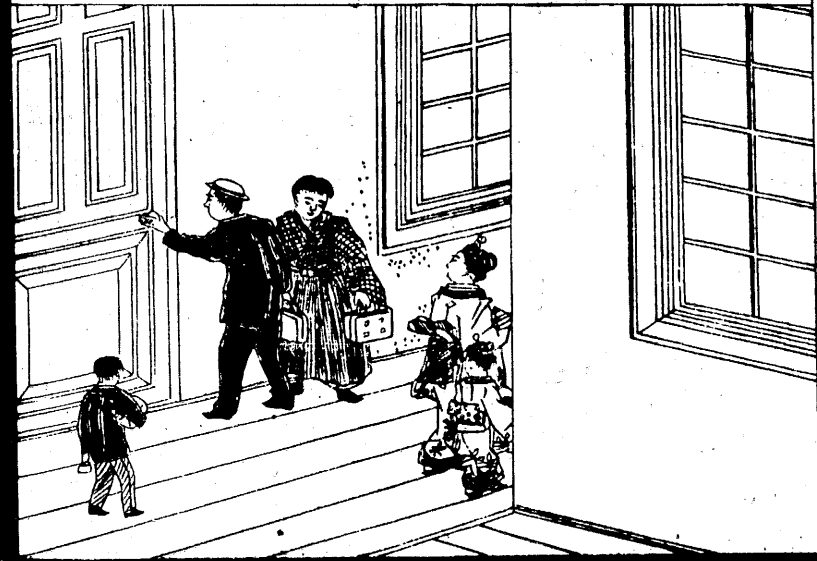
第十一條



教師は告げずして
みだりな教場の出
入をなすべからず

第十二條

障子襖の開閉ハ静
になし書物器械ハ
叮嚀は取扱ひ破損
せざる様又行厨ハ



静に食し人と湯茶を争ひ或ハ衣服な
ど濡さぬ様注意すべし

第十三條

教場は於書籍石盤等を出し納れする
ときハ響の聞えざる様に注意し又壁
塀其他の物へ濫書し又ハ外見雑談を
なすべからず

第十四條

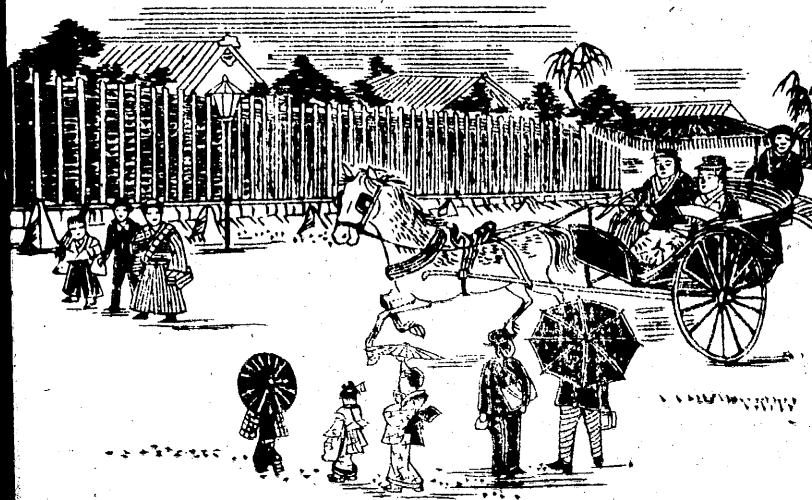
學校より往返する途
中より於遊び戯るべ
からず若車馬等より
行逢ふときは其通
り過るを待ち決し
て其前を馳過ぐべ
からず

第十五條

自宅へ歸りたるときと他出するとき
の其由を尊長より告げ敬禮をなすべし
但學校より歸りたるときは必日課
優劣表を尊長に示さべし

第十六條

雨天のときは別して傘はきものを取
揃へ置き退校のとき錯亂なき様注意
すべし



第十七條

學文をなすとも身體健康ならざれば其詮なかるべし常より左の條件を守りて自ら病を招くべからず

第一 課業畢る毎に體操場より出て

運動をなすべし

第二 運動をなすとも奔走すること

と度に過ぐべからず

第三

熱き湯茶

を強て飲

むべから

ず

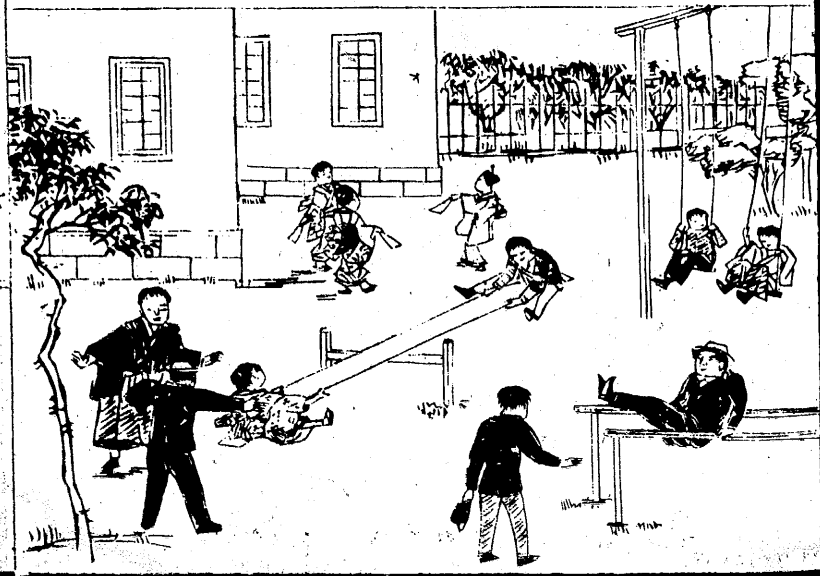
第四

字を寫し

算を學ぶ

に體を曲

け胸を屈



むべからず

第五 雨天は傘なくして歩行をべ
からず

第六 冠物なくして炎天を冒し跣
足よりして雪中を行くべから
ず

第十八條

急し覺えんとするときは却て忘れ易

きものなれば一事を覺えて後一事に
移る様に心掛くべし

第十九條

覺え惡として決して倦み怠るべからず
怠らず勉強するとき自然に覺ゆる
ものなり

但其日は教を受しことい退校の後
尊長の前まで復讀を爲すべし

第二十條

朋友と睦しく交り
決して不敬不遜の
振舞あるべからず
又人を誅謗すべか
らず

第二十一條

人より争を仕懸と



も決して之と争ふべからず其由を教
師に告て指示を受くべし

第二十二條

尊敬すべき人又ハ知己の人ハ出逢と
まハ敬禮をなすべし

小學生徒心得終

定積二編五巻

明治十五年十月三日

翻刻御届

東京芝三島町

翻刻人

山中市兵衛